

令和 7 年度 「仙台大学 DX 人材育成プログラム（応用基礎レベル）」の自己点検

No.	項目	点検結果	内容・改善等
1	プログラムの履修・修得状況	○	<p>本プログラムでは、「データサイエンスⅠ」（2単位）と「データサイエンスⅡ」（2単位）の2科目4単位を必修科目とし、「データ処理の基礎」（2単位）と「スポーツ計量学」（2単位）の2科目のいずれかの修得を求める選択科目に設定し、計3科目6単位を認定の要件としている。</p> <p>本プログラムは令和6年度以降に入学した学生を対象としており、該当する科目の開講年次が学科により全て開講されていないこともあるため、令和7年度の修了者は2名に留まったが、初めての修了者を出すことができた。次年度以降は履修者の増加が見込まれているため、引き続き当プログラムの魅力を積極的に学生へ周知・発信していく。</p>
2	学修成果	○	<p>各科目において、シラバスに定めた到達目標がおおむね達成されている。</p> <p>「データサイエンスⅠ」：機械学習や深層学習などのAIの基礎技術、ビッグデータの概念等について、実際の活用事例を交えることで学生の理解を深めることができた。</p> <p>「データサイエンスⅡ」：データサイエンスの基本概念と実践的応用の指導を通じ、多くの学生がデータの可視化、分析方法、アルゴリズムの実践的スキルを身に付けた。</p> <p>「データ処理の基礎」：データに応じた代表値やグラフの処理手法を教授し、データを正しく読み取る力や処理を高度化する力を育成できた。</p> <p>「スポーツ計量学」：データが持つ意味の理解や、スポーツ現象を客観的に計量・分析する手法を習得させることができた。</p>
3	学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	○	<p>本学では全科目で授業改善アンケートを実施するとともに、学生自身がルーブリックを活用して自己評価を行う取り組みを導入している。教員が付した成績評価と学生の自己評価の差異、および5段階評価の分布等について教員自身が点検・分析を行い、その結果を学内で共有することで教育改善のPDCAサイクルを回している。アンケート結果からは、学生の理解度・習熟度ならびに自己評価がいずれも高い水準にあることが確認されており、適切な教育効果が得られていると評価できる。</p>
4	学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	○	<p>修了者を対象とした「本教育プログラムを通じた学びについて」のアンケート調査において、大半の学生から「本プログラムを推奨したい」との肯定的な回答を得た。また、本プログラムでは修了証を電子データで交付しており、学修成果が「見える」形で残る仕組みを採用している。この点が学生のモチベーション向上に寄与し、高い推奨意向の一因となっていることが確認できた。</p>
5	教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	○	<p>本プログラムは令和6年度入学生から開始されたため、現時点での修了者は2名であり、卒業生が社会に輩出されるのは令和9年度となる見込みである。そのため現段階で進路や企業からの直接的な評価を検証することは困難であるが、将来的には修了者のキャリア状況や就職先企業からの評価を収集・分析できる体制を整えていく。</p>
6	産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	○	<p>卒業生が在籍する事業所や、学内合同業界研究セミナーに参加した企業を対象にアンケート調査を実施している。採用側が在学中に身につけてほしいICTスキルやデータ活用能力のニーズを定期的に聞き取っており、これらの産業界からの意見を今後の本教育プログラムのカリキュラム改善や教育内容の充実化を図るための基礎資料として継続的に活用している。</p>